

幼児の心的状態および感情の言語化に関する 基礎的研究

—保育士評定による幼児の語彙使用から—

A Basic Study on the Verbalization of Mental States and Emotions in Young Children

-A Study of Infants' Vocabulary Use Based on Nursery School Teachers' Ratings

飯田 都

Miyako IIDA

要旨：非認知能力の発達に寄与するとされる心的状態語および感情語の使用について、保育士の評定をもとに検討した。語彙の使用については、幼児が聞いた際に理解できる受容語彙と、自ら使用することもできる産出語彙の2つの観点を設け、90の心的状態語・感情語について評価を得た。その結果、基本的な感情語（「うれしい」「いや」など）はほぼすべての幼児に理解され、日常的に使用されている一方で、他者の心的状態を推察する語や、より抽象的で複雑な語は受容語彙にとどまり、産出語彙にまでは至らない場合が多いことが示された。産出語彙については、ポジティブな感情語の使用頻度がネガティブな語を上回る傾向や、中立的な意味を持つ感情語の高い理解と使用も確認された。幼児期の子どもの感情語彙をさらに広げていくためにも、保育者や周囲の大人が多様な心的状態語を意識的に使用し、子どもとともに語り合う機会を増やすことの重要性を示した。

キーワード：心的状態語 感情語 非認知能力 幼児 言語発達

問題と目的

近年、教育関連場面において、非認知能力に高い関心が寄せられるようになった。IQや学力といった認知能力以上に、子どもがより良い人生を歩む上で、大きな影響力を持つことが明らかになりつつあるからである（Tough, 2017）。Heckmanらが示すように、非認知能力が育まれる機会を逃した子どもは、大人になった後に仕事や生活面でより多くの機会を失う可能性が高い。遠藤ら（2017）は、非認知能力の中でも、特に将来的なアウトカムとの関連が指摘されるものとして、自己制御、自尊心（自己肯定感）、向社会性、レジリエンス、を挙げている。このうち、子どもの学業上の成功ということに関していうと、Heckmanは重要な決定要因は、「自己制御」と「実行機能」だとしている。さらには、自己制御と実行機能は育むものであるとし、子どもが自己制御を身に付ける上で肝要であるのは、「言葉」であることを指摘している（Suskind, 2018）。Vygotsky（1934）もまた、「自己制御」において言葉のスキルが大きな役割を果たすとした仮説を提唱しており、現在、多くの科学研究により支持されている。言葉が十分でない環境で育った子どもは、その原因がどのようなことであれ、「自己制御」の課題が多い傾向にあり、語彙の増加に焦点を当てた介入は、子どもの言葉の力を伸ばし、社会的スキルをも伸ばすことが知られている（Suskind, 2018）。社会的スキルは非認知能力に含まれる能力の一つであり、言葉の力が向上することにより、非認知能力の育成が後押しされることが考えられる。また言葉は、

認知的スキル、非認知的スキル双方を支える基盤であるだけでなく、子どもの人格形成の上でも大きな役割を果たしている。「私」という存在も、「私」にとっての世界も、所持する言葉によって描き出されたものである。経験を振り返る際、映像的イメージを思い浮かべるにしても、それは言葉による加工を受けている。つまり、経験したことは、自身の持つ言葉によって意味づけられ、記憶として取り込まれていくということである。語り、意味づける言葉を持たないということは、経験から引き出される価値が豊かなものとはなり難く、また記憶に留まりにくい、ということでもある。子どもが体験を言葉にしていくということは、その体験を自分のものとして学び取っていく上でも、非常に大切なことである。この点について遠藤（2017）は非認知能力の発達に関わる報告書の中で、内面状態を表す言葉である感情語や心的状態語の獲得によってスムーズで明確な内面状態の伝達や理解が可能になり、やがて記憶を形成する能力が発達するのに伴い、言葉で表現することを通じて過去の経験を他者と共有することや、自己を振り返り出来事について洞察を深めることができるようになり、自己形成や人格の発達につながっていくことを述べている。そしてこの言葉の力に裏打ちされた内省力は、他者との良好な関係構築、社会的問題解決、そして他者のための自発的な行動である向社会的行動といった非認知能力の発達につながっていくという。

このように、言葉の力を育むことの重要性ならびに必要性は加速度的に認識が高まっているものの、その教育方法や不利な状況にある子どもへの支援という点では、未だ効果的な方策を見出す十分な歩みを踏み出しているとは言い難い。また、言葉には語彙、構文、文法、さらにはその種類、下位分類といった様々な側面があることに加え、子どもの言語獲得の発達段階をも考慮し、言葉の力を育む方策を提案する必要がある。しかし、こうしたすべての点を考慮した包括的研究という到達点に向けて、現在は未だ知見の地道な積み重ねを要する段階にある。

以上のことから、本稿では、非認知能力の発達支援に寄与することを見据えた上で、その発達に強く関連することが見込まれる幼児の心的状態語ならびに感情語に焦点を当て、受容語彙および産出語彙の観点から、幼児の語彙の使用状況について検討することを目的とする。「産出語彙」とは、話すときに実際に子どもが使用できる語彙を指し、聞いて意味を理解できる語彙は「受容語彙」と呼ばれ区別されている。3歳以下の子どもを対象とした研究では、特に感情にかかわる産出語彙が多いほど、他者の心的状態を正しく理解し（例えば Bretherton&Beeghly,1982;Tsuji, 2011）、向社会的にふるまうことが明らかにされてきた（Newton et al., 2014;Nichols et al., 2009）。より高い年齢の子どもについても、感情語彙能力（産出語彙）が高い低学年児ほど自己の感情をよく理解し、かつ他者の感情をうまく調整できる可能性が示唆されており（浜名・分寺, 2023）、子どもの感情語彙の状態は、社会化や感情経験といった社会情動的発達に重要な役割を持っていることが考えられる（Kopp,1989）。この感情語彙にかかわる能力は、月齢が進むにつれて高まっていくことが示されているが（Baron-Cohen et al., 2010;Bretherton&Beeghly, 1982; Li & Yu, 2015;Nichols et al., 2009）、感情語彙能力のうち、受容語彙の能力が高いほど、産出語彙の能力も高く、両者は比例関係にあり（浜名・分寺, 2023）、いずれの語彙も非認知能力の発達を後押しする要因であると考えられる。

なお、幼児を対象とした場合、子どもの語彙の測定は、保護者を対象とした質問紙にお

いて単語リストを提示し、それぞれの語を子どもが普段使用しているか（産出語彙）、もしくは理解しているか（受容語彙）を回答させることで行われることが多い。しかし、家庭以外の場における幼児の語彙の使用について、保護者以外の大人の立場から評定した研究は見当たらない。家庭以外の場において、そして家族以外の人間関係の中であるからこそ用いられ、表出しやすい幼児の言葉も存在するものと考えられる。そこで本研究では、幼児の心的状態語ならびに感情語について、彼らを園で担当し、共に過ごす時間を共有している保育者からの評定に基づき評定を得る。また、その子どもが自ら使用することはなくとも、他者が使用する様子に触れてその言葉を理解できることがあるという事実は、非認知能力との関連を考えていくにあたり、語彙の有無を単純に二分化してとらえることが相応しくない理由のひとつともなる。そのため、本研究では幼児の心的状態語ならびに感情語について、受容語彙と産出語彙の両側面について、担当保育士より評定を得て検討することとした。

方法

調査内容 Web フォームを用いた質問紙調査により、子どもの感情語彙、内的状態語彙の使用について測定した。年少、年中、年長のいずれかを担当する保育士に、現在担当している学齢の平均的な子どもの言葉の使用に基づき回答いただけるよう依頼し、各語彙に対し、子どもが知らない場合には「知らない」、使わないけれども知っている場合には「知っているが、使わない」、知っておりなおかつ子ども自身がその言葉を使用している場合には「知っており、使っている」を選択し回答を得た。

感情語・心的状態語リストの作成 辻・戸井（2016）の心的状態語、浜名・分寺（2023）の感情語彙、岩田（1999）の内的状態語のカテゴリー、Tsuji（2011）ならびに園田・無藤（1996）の使用した内的状態語一覧、仲（2010）による2人以上の幼児、児童が用いた感情表現のリストを参考に、感情語を含む内的状態語を90語抽出した。このうち、「厚情」「恭敬」「嘆賞」の3語については、浜名ら（2023）にならい、無気力回答者判定のためにリストに付け加えることとした。

参加者 Web 調査会社を通して、年少児～年長児のいずれかの子どもを現在受け持っている保育士74名が参加した。研究終了後、参加者には商品との交換や換金が可能なポイントが配布された。

参加者のうち、無気力回答者判定のための項目である「厚情」「恭敬」「嘆賞」のいずれかに対し「知っている」もしくは「知っており、使っている」と回答した者を除外し、最終的な有効回答者数は45名となった（平均年齢42.6歳、SD = 9.5歳）。保育士が評定した子どもの学齢群の内訳は、年少25名、年中11名、年長9名であった。

倫理的配慮 Web上の質問紙の上方に、研究趣旨と倫理的配慮について説明する文章を記載した。研究協力は任意であり、協力しないことによる不利益は何もないこと、データは数値化され統計的に処理されるため、回答者について特定されることがないことを記し

た。参加者は画面上に表示された倫理的配慮に関する説明を読み、同意した者のみが回答に進んだ。

データの得点化 項目については、まず無気力回答者判定のための3項目を削除した。そのうえで、産出語彙については、「知らない」「知っているが、使わない」を0点、「知っており、使っている」を1点として得点化した。受容語彙については、「知らない」を0点、「知っている」「知っており、使っている」を1点として得点化した。

結果

感情語を含む心的状態語のリストのうち、Emotional terms（感情語）についての結果をTable1に示した。感情を表す語の中でも、ポジティブな意味合いを有する語に関しては「嬉しい」「良い（いい）」「楽しい」「ありがとう」といった自身の気持ちを表す基本的な語を中心に、産出語彙、受容語彙ともにほぼすべての幼児が理解し、日頃使用していることが示された。一方で、多くの子どもが知っているものの、自らが使うにまでには至っていない語として「喜ぶ」「幸せ」「大切」がある。「喜ぶ」は、自身よりは他者を主語として用いられることが多いと考えられ、他者の気持ちの推察・理解を要するぶん負荷が高く、産出語彙にまでは至らないことがあるのかもしれない。「大切」は、教育やしつけにおいて保護者や保育者が使用することのある言葉であると考えられ、子どもは受容語彙としては多くが理解しているが、自身が使用するには価値・状況判断を伴うため、自ら用いるには難しさがあることが理由として考えられた。「幸せ」は、「嬉しい」「喜ぶ」に近い意味合いを持つ言葉であるが、これらの語との違いを理解し、より詳細なポジティブな気持ちを表すために使用することができるのは、全体の半数ほどという結果となった。なお、「感動」「あこがれ」「幸運」「尊敬」といった、自身の気持ちの高まりや自身の目標、考えにも関わる語に関しては、中には理解できる子どももいるが、自ら使用することはあまりないことが示唆された。続いてネガティブな感情語についてであるが、「いや、やだ、やー」「怒る」「悲しい」「怖い」「かわいそう」「嫌い」「さみしい」といった、自身の気持ちを表す基本的な語を中心に、産出語彙、受容語彙ともにほぼすべての幼児が理解し、日頃使用している、との結果が得られた。一方で、多くの子どもが知っているものの、自らが使うにまでには至っていない語として「悔しい」「残念」「飽きる」「がっかり」「しつこい」「心配」「ひどい」がある。これらは、好きか嫌いか、のような2項対立的な好悪の感情ではなく、ネガティブな意味合いを持つ感情を表している中でも、あらかじめの想定や期待など、より複雑な状況や他者との関係性を経験した際に抱き得るものであると考えられる。なお、「落ち込む」「迷惑」「呆れる」「恐ろしい」「うざい」「だるい」「消えろ」の各語については、産出語彙として多くの子どもが獲得していることが示された先述の「いや」「怒る」「嫌い」と類似した意味合いを含んでいると考えられるが、これらとのニュアンスの違いは未だ理解にも使用にも至っていないようで、受容語彙としても半数弱～それ以下の子どもについてのみ認められるにとどまった。さらに、「不幸」「悩む」については、言葉の意味理解ができる子どもは1/4以下とさらに限られている。より複雑な精神機序や、自身の気持ちの表現としては比較的堅い表現に該当する言葉であり、幼児の学齢ではあま

Table1 Emotional terms(感情語)得点の平均と標準偏差

項目	産出語彙		受容語彙	
	平均	SD	平均	SD
ポジティブ				
嬉しい	0.933	0.252	1.000	0.000
良い, いい	1.000	0.000	1.000	0.000
喜ぶ	0.711	0.458	0.956	0.208
楽しい	0.956	0.208	1.000	0.000
感動	0.156	0.367	0.444	0.503
幸せ	0.511	0.506	0.778	0.420
大切	0.689	0.468	0.933	0.252
あこがれ	0.156	0.367	0.356	0.484
幸運	0.067	0.252	0.222	0.420
尊敬	0.044	0.208	0.178	0.387
ありがとう	0.978	0.149	1.000	0.000
ネガティブ				
いや, やだ, やー	0.933	0.252	1.000	0.000
悔しい	0.467	0.505	0.756	0.435
怒る	0.889	0.318	1.000	0.000
悲しい	0.689	0.468	0.956	0.208
怖い	0.889	0.318	1.000	0.000
かわいそう	0.867	0.344	1.000	0.000
嫌い	0.778	0.420	1.000	0.000
さみしい	0.733	0.447	0.978	0.149
残念	0.533	0.505	0.889	0.318
飽きる	0.444	0.503	0.756	0.435
落ち込む	0.178	0.387	0.511	0.506
がっかり	0.422	0.499	0.733	0.447
しつこい	0.400	0.495	0.667	0.477
心配	0.511	0.506	0.844	0.367
ひどい	0.533	0.505	0.800	0.405
不幸	0.022	0.149	0.200	0.405
迷惑	0.244	0.435	0.622	0.490
呆れる (あきれる)	0.067	0.252	0.222	0.420
恐ろしい	0.133	0.344	0.511	0.506
憎む	0.022	0.149	0.156	0.367
うざい	0.133	0.344	0.511	0.506
だるい	0.244	0.435	0.556	0.503
消えろ	0.111	0.318	0.489	0.506
中立				
変 (へん)	0.667	0.477	0.867	0.344
びっくり	0.933	0.252	0.978	0.149
驚く	0.467	0.505	0.844	0.367
甘える	0.489	0.506	0.800	0.405
緊張	0.444	0.503	0.689	0.468

り理解が及んでいない様子が見受けられた。全体的に、ポジティブな感情語に比べると、ネガティブな感情語においては、受容語彙としては認められても、産出語彙にまでは至っていない語が多く見られたことが特徴的である。最後に、感情語の中でも、比較的中立的な意味合いを持つ語彙についてみていくと、「びっくり」が産出語彙、受容語彙ともにほぼすべての幼児が理解し、日頃使用しているとの結果が得られた。それ以外の「変（へん）」「驚く」「甘える」「緊張」については、多くの幼児が理解しており、なおかつ日常の中で自ら使用している子どもも半数近くに上ることが分かった。ポジティブでもネガティブでもない感情語彙については、語彙間の差が比較的少なく、子どもに獲得されている傾向があった。

第二に、Cognitive terms（認知語）についてであるが、結果はTable2に示したとおりである。自身の立場からの見え方や考えを説明する「～だと思う」、自身に起こった現象や希望する状態について表現する「夢を見る」については、多くの幼児が聞いて理解することができる一方で、まだ自身で使用するまでには至っていない。しかしこの2語を除いた「わかる（わかった）」「むずかしい」「やさしい」「覚えている」「忘れる」については、ほとんどの子どもが理解することができるだけでなく、かなりの割合で使用もしている様子が見受けられた。しかし認知語の中でも心身の困難な状態を表す「つらい」についてのみ、他の語に比べて受容も産出も低い結果となった。これは、多くの子どもが理解し使用している感情語である「嫌だ」「嫌い」といったメジャーな語彙にその感覚が取り込まれており、より派生的な感覚の認知を表す語彙の理解には、さらなるレキシコンの分化が待たれる学齢であるがゆえの結果と推察された。

第三に、Mental state terms（精神状態語）について、結果をTable3にまとめた。精神状態を表す語の中でも、ポジティブな意味合いを有する語に関しては「好き」が突出して高い結果となっており、100%の幼児が理解し使用もしていることが示された。一方で「安心」「満足する」といった穏やかで満たされた状態を表す語については、知っており理解できる子どもが多いものの、自ら使用するには至っていない。さらには「気合」という、精神を集中させて事に当たるときの気持ちをカジュアルに表現する語については、自ら使う子どもこそ少ないものの、4割弱の幼児が聞いて理解することができるとの結果となった。ただし、活気に満ちて勢いがよい様子を表す語である「生き生きした」は受容語彙としては半数以上が理解しているものの、自ら使用することはあまりない。これは自身の精神状態を表現する際に、生き生きしたという語は用いず、類似語である「元気だ」のよう

Table2 Cognitive terms（認知語）得点の平均と標準偏差

項目	産出語彙		受容語彙	
	平均	SD	平均	SD
わかる（わかった）	0.911	0.288	1.000	0.000
むずかしい	0.911	0.288	0.956	0.208
やさしい	0.889	0.318	0.978	0.149
覚えている	0.622	0.490	0.933	0.252
忘れる	0.778	0.420	0.956	0.208
～だと思う	0.644	0.484	0.800	0.405
夢を見る	0.533	0.505	0.778	0.420
つらい	0.178	0.387	0.600	0.495

Table3 Mental state terms(精神状態語)の得点と標準偏差

項目	産出語彙		受容語彙	
	平均	SD	平均	SD
ポジティブ				
好き	1.000	0.000	1.000	0.000
安心	0.444	0.503	0.844	0.367
満足する	0.311	0.468	0.667	0.477
生き生きした	0.089	0.288	0.156	0.367
気合	0.156	0.367	0.378	0.490
ネガティブ				
気にする	0.444	0.503	0.667	0.477
後悔する	0.133	0.344	0.311	0.468
困る	0.622	0.490	0.911	0.288
疑う	0.067	0.252	0.289	0.458
どうしよう	0.756	0.435	0.933	0.252
あわてる	0.333	0.477	0.622	0.490
不安	0.244	0.435	0.511	0.506
焦る	0.178	0.387	0.489	0.506
悩む	0.311	0.468	0.578	0.499
不満	0.000	0.000	0.222	0.420
中立				
欲しい	0.956	0.208	1.000	0.000
知っている	0.889	0.318	1.000	0.000
考える	0.644	0.484	0.867	0.344
きっと～	0.578	0.499	0.822	0.387
不思議 (に思う)	0.533	0.505	0.778	0.420
～のつもり	0.378	0.490	0.689	0.468

なより身近な語に代替され得ることに起因する可能性も考えられる。続いてネガティブな精神状態語についてであるが、「困る」「どうしよう」の2語が、受容語彙としても産出語彙としても、他の語に比べて突出して高かった。日常で経験するどうしたらよいか自分ではわからない場面で感じる戸惑いの気持ちは、彼らの身近なものであり、その心的状態を表す語として使用される機会が比較的多いものと考えられる。ネガティブな心的状態語の中でも、受容語彙としては獲得されているが、産出語彙としてはあまり多くはない語として「あわてる」「不安」「焦る」「悩む」が見出され、続けて「疑う」「不満」が、さらに受容・産出共に低い頻度である語として示された。「あわてる」「不安」「焦る」「悩む」は幼児の日常の経験に常に存在する心的状態であると考えられるが、「疑う」「不満」というのはより強い自我の確立があってこそその精神状態であり、幼児が理解し使用するには難しい語であるといえるかもしれない。最後に中立的意味合いを持つ精神状態語であるが、「欲しい」「知っている」の2語が、受容語彙としても産出語彙としても、他の語に比べて突出して高かった。自身の欲求を表現したり、既知であることを知らせるための語であり、幼児の生活により密着した気持ちの表現に用いられる語であり、受容・産出共に高い結果が得られたものと考えられる。「考える」「きっと～」「不思議 (に思う)」「～のつもり」も比較的高い得点を示し感情語についての結果と同様、中立的な意味合いを持つ語につい

Table4 Syntax (構文) の得点と標準偏差

項目	産出語彙		受容語彙	
	平均	SD	平均	SD
～ね (例: きれいね)	0.933	0.252	0.978	0.149
～たい (例: 食べたい)	0.933	0.252	0.978	0.149
～よう (例: 食べよう)	0.933	0.252	0.978	0.149
～たくない (例: 食べたくない)	0.911	0.288	0.978	0.149
～う (例: 飲もう)	0.889	0.318	0.933	0.252
～かな (例: 行こうかな)	0.778	0.420	0.956	0.208
～たかった (例: 食べたかった)	0.933	0.252	0.956	0.208
～たら (例: 食べたら)	0.800	0.405	0.956	0.208
～よ (例: 暑いよ)	0.911	0.288	0.978	0.149
～でしょう (例: 食べるでしょう)	0.511	0.506	0.800	0.405

ては、より理解や使用を得やすい可能性が考えられた。

第四に、別の単語などを組み合わせて文を作る統語論的言い回しについての結果を Table4 に示した。推量や予測を表す「～でしょう (例: 食べるでしょう)」の産出語彙としての使用がやや低かったものの、概して「～ね」「～たい」「～よう」等の Syntax を用いた心的状態語は産出語彙としても受容語彙としても、いずれの面でも高い理解・使用の状況が認められた。幼児は、心的状態語を用いることに比べ、既知の言葉と Syntax を組み合わせることによって自身の気持ちを表現することの方が多くと考えることができる。

最後に、Physical state terms (身体状態語) についての結果を Table5 に示した。「苦しい」について産出・受容共にやや低い傾向が認められたものの、語の意味合い (ポジティブ、ネガティブ、中立) の如何を問わず、いずれもほとんどすべての幼児が聞いて理解することができ、産出語彙として自ら使用することもできる様子がみとれる。身体の状態を表現することは、心的状態のそれに比べより幼児の生活に組み込まれているものであり、その必要性も高いことに、この結果は起因すると考えられた。

Table5 Physical state terms(身体状態語)の得点と標準偏差

項目	産出語彙		受容語彙	
	平均	SD	平均	SD
ポジティブ				
笑う	0.889	0.318	1.000	0.000
おいしい	0.978	0.149	1.000	0.000
ネガティブ				
痛い	0.956	0.208	1.000	0.000
泣く	0.933	0.252	1.000	0.000
疲れた	0.822	0.387	0.956	0.208
気持ち悪い	0.711	0.458	0.956	0.208
苦しい	0.267	0.447	0.733	0.447
中立				
見る	0.956	0.208	1.000	0.000
眠い	0.956	0.208	1.000	0.000

考察

本研究の結果より、以下の諸点が明らかになった。まず第一に、年少～年長にかけての学齢にある幼児が、どのような心的状態語を理解し、日頃実際に使用しているかということである。ひとつには、「いや」「悲しい」「かわいそう」「嫌い」「さみしい」といった、自身の気持ちを表す基本的な語がそれに該当することが示された。また、幼児の生活により密着した気持ちの表現に用いられる語は受容語彙としても産出語彙としても高い結果が得られた。自身の欲求を表現するための「欲しい」、既知であることを知らせるための語である「知っている」、どうしたらよいのか自分ではわからない場面で感じる戸惑いを伝えるための「困る」「どうしよう」がそれにあたる。

第二に、幼児が未だ使用することが難しい語には、2項対立的な感情ではなく、あらかじめの想定や期待などとの比較や、より複雑な状況や他者との関係性を経験した際に抱き得るものであったり、自身の立場からの見え方や考えを説明するもの、そして自身に起こった現象や希望する状態について表現するための語、他者の気持ちの推察・理解を要するもの、より複雑な精神機序や、自身の気持ちの表現としては比較的堅い表現に該当する言葉、類似の意味合いを持つ語との微細なニュアンスの違いや語彙の境界の理解が必要とされるもの、が見られた。また、強い自我の確立があってこそその精神状態を表現する語については、受容・産出ともに低かった。

第三に、ポジティブでもネガティブでもない中立的な意味合いの感情語彙については、語彙間の差が比較的少なく、子どもに獲得されていた。「考える」「きっと～」「不思議（に思う）」「～のつもり」の中立的な語についても同様で、中立的な意味合いを持つ語については、より理解や使用を得やすい可能性が考えられた。

第四に、「気合」「うざい」のような、日常生活で用いられる心的状態語ではあるものの、より生活的でカジュアルな表現で用いられる語彙について、自ら使う子どもこそ少ないものの、4～5割ほどの幼児が聞いて理解することができることが示された点も特筆される。心的状態や感情の表現は、必ずしも辞書に掲載されるよりオフィシャルな語を用いなければいけないというのではなく、その語を通じて子どもが社会と意思疎通をよくはかることができるのであれば、同等の効果が期待できよう。

第五に、ポジティブな感情語に比べると、ネガティブな感情語においては、受容語彙としては認められても、産出語彙にまでは至っていない語が多く見られたことが特徴的であった。子どもが感情語彙を使用し、自ら語りたいのは、ポジティブな出来事や経験であるということなのかもしれない。

最後に、Physical state terms（身体状態）については、心的状態語に比べ、その語の意味合い（ポジティブ、ネガティブ、中立）の如何を問わず、いずれもほとんどすべての幼児が聞いて理解することができ、産出語彙として自ら使用することもできることが示された。心的状態は可視化されておらず、自身で感じたことを言語化する必要があるのに比べ、身体の状態については、五感を通して感じ取れることであり、感覚を言葉に置き換えるにしても、より難度が低いことなのであろう。

以上のように、幼児期は様々な感情の原型となるような基本的感情語彙の理解と使用が認められ、今後、発達とともにさらなる心的状態語へと広がっていくであろう、受容語彙

の高まりもうかがい知ることができた。新しい語が獲得されて使用できるようになった後も、さらにそのレキシコンの再編成が継続され、その語の意味範囲は変化を遂げていくものである(浜名・針生, 2015)。心的状態語や感情語を使って自身の感情を言語化していくことは、冒頭に述べたように、社会情動的側面に肯定的な影響を与え得る(Fabes et al., 2001; Torre & Liberman, 2018)だけでなく、自身が経験しているいかなる感情をも和らげる効果を持ち、心身の健康を改善し(Torre&Liberman, 2018)、良好な人間関係の構築を促すことにもつながっていく(Fabes et al., 2001)。また、内的状態語の獲得が、他者の心の理解と密接に関連することが指摘され(Bartsh & Wellman, 1995)、子どもは感情語の使用を通して徐々に感情状態への気づきを増していくと言われており(遠藤, 2002)、感情語の獲得が相手の表情を理解し、その相手への適切な行動を促進することが明らかとなっている(Newton, Goodman & Thompson, 2014)。Bretherton & Beeghly (1982)は、内的状態を表す語を6つのカテゴリーに分け、そのカテゴリーの一つとして感情語を扱い、知覚、身体、意思・能力、認知、倫理判断・義務の5つのカテゴリーとは区別して、28か月児の母親への質問紙調査を行った。その結果から、感情語は、知覚、身体、意思・能力カテゴリーの語に比して、獲得されにくいものとなっていることが示された。この点は、本研究の結果とも一致しているところである。

このように、元より他の語彙に比べ獲得しづらい感情語彙の発達に向けて、周囲の大人が貢献できることはどのようなことであろうか。現在獲得されている感情語に隣接する語彙へと子どものレキシコンが広がるよう、子どもがわかる言葉だけでなく、心的状態を表す多種多様な話に触れることができるよう、子どもに接する大人の使用する言葉にも意識を向け、子どもとともに、出来事や経験について共に語り合う時間を設けていくことや、絵本の読み聞かせの時間のあり方の見直しも、効果的環境づくりには有益であると思われる。

付記 本研究は、公益財団法人橋本財団による福祉研究助成を受けて実施されました。

引用文献

- Baron-Cohen, S., Golan, O., Wheelwright, S., Grander, Y., & Hill, J. (2010). Emotion word comprehension from 4 to 16 years old: A developmental survey. *Frontiers in Evolutionary Neuroscience*, 2, Article 109.
- Barsch, K., & Wellman, H.M. (1995). *Children talk about the mind*. New York: Oxford University Press.
- Bretherton, I., & Beeghly, M. (1982). Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18 (6), 906-921.
- 遠藤利彦 (2002). 発達における情動と認知の絡み 高橋雅延・谷口高士(編)感情と心理学：発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開 (pp.2-40) 北大路書房
- 遠藤利彦 (2017). 非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書 国立教育政策研究所
- Fabes, R.A., Eisenberg, N., Hanish, L. D., & Spinrad, T. L. (2001). Preschoolers' spontaneous emotion vocabulary: Relations to likability. *Early Education and Development*, 12, 11-27.

- 浜名真以・針生悦子 (2015). 幼児期における感情語の意味範囲の発達の变化 発達心理学研究, 26, 46-55.
- 浜名真以・分寺杏介 (2023). 項目反応理論を用いた幼児および小学校低学年用短縮版感情語彙尺度の開発 教育心理学研究, 71, 51-61.
- Kopp,C.B. (1989). Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. *Developmental Psychology*, 25,343-354.
- Li, Y., & Yu, D. (2015). Development of emotion word comprehension in Chinese children from 2 to 13 years old: Relationships with valence and empathy. *PLoS ONE*, 10, Article e0143712
- 仲真紀子 (2010). 子どもによるポジティブ, ネガティブな気持ちの表現: 安全, 非安全な状況にかかわる感情語の使用 発達心理学研究, 21, 365-374.
- Newton, E.K., Goodman M., & Thompson, R.A. (2014). Why do some toddlers help a stranger? Origins of individual differences in prosocial behavior. *Infancy*, 19, 214-226.
- Nichols,S.R.,Svetlova,M., & Brownell,C.A. (2009). The role of social understanding and empathetic disposition in young children's responsiveness to distress in parents and peers. *Cognition, Brain, Behavior*,13,449-478.
- 園田菜摘・無藤隆 (1996). 母子相互作用における内的状態への言及: 場面差と母親の個人差 発達心理学研究, 7, 159-169.
- Suskind, D. (2015). *Thirty Million Words:Building a Child's Brain* Dutton/Penguin Random House LCC.
- (ダナ・サスキンド (2018). 3000万語の格差 —赤ちゃんの脳をつくる, 親と保育者の話しかけ—明石書店)
- Torre, J. B., & Liberman, M.D. (2018). Putting feelings into words: Affect labeling as implicit emotion regulation. *Emotion Review*, 10, 116-124.
- Tough, P. (2016). *Helping Children succeed:What works and why*. Boston, MA:Houghton Mifflin Harcourt. (タフ, P. 高山真由美 (訳) (2017). 私たちは子どもになにができるのか —非認知能力を育み, 格差に挑む— 英知出版)
- Tsuji, H. (2011). Emergence of mental state words and language development. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 1, 71-77.
- 辻弘美・戸井洋子 (2016). 3歳児における心的状態語の使用の個人差の検討 —養育環境と社会認知発達との関連— 電子情報通信学会 19-24.
- Vygotsky, L. S. (1934/1986). *Thought and Language*. Cambridge, Mass. The MIT Press.

